

五島瑳智子先生を偲んで

看護学部長
出野 慶子

本学の名誉教授であり、医療短期大学名誉学長でもある五島瑳智子先生が、2015年8月13日に87歳の生涯を閉じられ永眠されました。お花が大好きだった先生らしく、斎場では飾りきれないほどのお花に囲まれ、多くの弔問者の深い悲しみの中、ご葬儀が行われました。先生は、中国との看護交流にも多大な貢献をされており、中国からの研修生の中には、現在、中国看護協会のトップとして活躍しておられる方もいらっしゃいます。先生の訃報に中国から駆けつけて葬儀に参列して下さったことに感謝するとともに、先生の人徳の高さをあらためて感じました。

五島先生は医師でありながら、現在の看護学部の教育の礎を築いた方であり、「文化講座」「ヨーロッパ研修」をはじめとした特色ある科目や、戴帽式などの行事をとおして教養を身につけ、感性を磨く人間教育を大事にいらっしゃいました。新入生オリエンテーションキャンプでは、「学生には本物を見聞かせたい」と、その道のスペシャリストによるプログラムを取り入れ、今年度のご自身の講演では、知性、感性、品性、適性が看護師として大切であることなどを学生に話されていました。先生の講演を踏まえて、これからの学生生活について考えた新入生は多かったかと思えます。

4年生は東京小児療育病院・みどり愛育園（重症心身障害児・者施設）で見学実習を行っていますが、この施設の設立から運営にも先生は深くかかわっておられました。2月に開催された創立五十周年記念式典では、理事である先生がこれまでの経緯を語り、関係者のご苦勞や、重度の障がいもちながら生活する方への医療・看護・福祉に関する思いが伝わってきました。

学生にも教職員に対しても、いつも大きなお声で挨拶されていた先生の凛とした笑顔が思い出されます。また、「講義だけだったら、上手な非常勤講師はいくらでもいる」と、大学における専任教員に求められるものは何か、を考えさせられるお言葉をいただいたこともありました。このほか、本当に多くのことを学ばせていただき、体験をとおして感じる・考えることの大切さも様々な場面で実感しました。先生が、ご自身の闘病生活で感じたことを「学生に伝えたい」と話されていたことが印象に残っています。

いつも毅然とした態度をとられ、人を惹きつける魅力があり、先生の言葉に対しては思わず「頑張ります」と、前向きになってしまうものでした。看護学部にとって大きな支えを失ったことは誠に残念ではありますが、これまで先生が築きあげてこられた看護教育を継承するとともに、これからの社会を見据えて、学部の発展につながる教育・研究を行っていきたいと思えます。

五島先生を偲んで

東邦大学医療センター大森病院
副院長・看護部長 佐藤ちず子

五島先生の訃報は、余りにも突然の出来事であり我が耳を疑いました。東邦大学創立90周年記念式典でお会いした時に、少しお痩せになられたように感じお声をかけたところ、「入院先から来たのよ」とリストバンドを見せてくださいました。その時、ご入院されていたことを初めて知りましたが、いつもと変わらぬ笑顔で「またお話しするわね」と話され、お別れいたしました。そして、翌月の7月5日の看護同窓会総会でお会いしたのが最後になってしまいました。この時に、先生のご著書である『自分に水をやる』を頂戴しました。本の帯に書かれている“背筋を伸ばし、夢を持ち、凜と美しく生きて参りましょう”を拝見し、これはまさに五島先生のことだと感じたのを覚えています。

2012年10月、中国の北京にある中日友好病院のシンポジウムに参加するために、横井先生と共に五島先生とご一緒したことが思い出されます。日中国交正常化40周年の節目でしたが、尖閣諸島の領土問題から勃発した反日デモが各地で行われ不安定な状況下での訪問となりました。しかし、このような時だからこそ行くのだという先生の強い信念と覚悟を垣間見た旅でした。

先生はいつも満面の笑みを浮かべて、キラキラした優しくも厳しい目で、含蓄のあるお話をストレートにされました。豪快に笑い、時にお茶目で、とても可愛い女性でもありました。

いま私は、先生から頂戴したご著書が先生からの最後のメッセージであると心得、ひとこと一言に秘められている先生の慈愛をこころ静かに感じています。先生から「しっかりしなさい、色々なことを吸収して成長しなさい、胸を張って頑張りなさい」と叱咤激励されているように思います。これまで、本当にありがとうございました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

五島瑳智子先生との思い出

東邦大学医療センター大橋病院
副院長・看護部長 影山 美子

本学の名誉教授である五島瑳智子先生が、87歳の生涯を閉じられ、8月13日に大橋病院で永眠されました。先生は入院生活の中で、ご不便や気付かれた事もたくさんあったと思います。しかし、いつも先生からは、病室に伺う私に、職員の良いところや旅の思い出など色々な事を話して下さい、逆に勇気を頂いていました。先生の間味あふれるお人柄は、大変魅力的な女性の象徴でした。そして、いつも配慮ある対応に感謝し、尊敬の念を抱いておりました。

私にとって忘れられない先生との思い出は、先生が東邦大学医療短期大学の学長をなさっていた頃のことです。たまたま青山のレストランで先生にお会いしたのです。短大の卒業生も一緒でしたので、ご挨拶をして私達は食事を楽しんでいました。お帰りになる時には、先生から気さくに声をかけて下さりました。そして、その後、先生から私たちのテーブルに美味しいワインが届けられたのです。歓喜の声が上がったのは言うまでもなく、同時に先生のスマートさに圧感した夜は、楽しい宴の思い出として私の中に残っています。

その後も先生がなされるお話を伺う度に、先生の言霊の力に勇気を頂きました。そんな尊敬すべき先生を失った事は、誠に心残りです。これからも先生のご意思を引き継ぎ、患者・家族に真摯に向き合う看護師を育てていきたいと思っております。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

五島瑳智子先生を偲んで

東邦大学医療センター佐倉病院
副院長・看護部長 寺口 恵子

2015年8月13日、長野の実家に帰省していた私のもとに五島瑳智子先生がお亡くなりになったとの訃報が届き、大変驚くと共に深い悲しみに包まれました。

五島先生は東邦大学医療短期大学設立に力を注がれ、1985年開学から東邦大学看護学部になる2001年まで学長を歴任され、医師でありながら、東邦大学の看護の発展を誰よりも望まれていた方でした。

私が東邦大学医療センター佐倉病院の看護部長に就任した際にも、卒業生が看護部長になったことを大変喜んでくださいました。看護師確保が難しいと悩んでいると「ピンチはチャンス!」「頑張っていれば必ず報われるから」と声を掛けてくださり、会う度に何か支援することはないかと聞いてくださいました。東邦大学から離れ、佐倉病院の開院時に戻ってきた私にとって、五島先生の優しい笑顔と声掛けがどれ程心強かったか、感謝の気持ちでいっぱいです。

東邦大学開学90周年記念式典で「入院中で外出許可を貰ってきたの」と微笑みながら、佐倉病院は大丈夫かと気遣ってくださったのが最期となってしまいましたが、ブルーのブレザーと白のパンツ姿で満面の笑みを浮かべて颯爽と歩かれる先生のお姿が浮かんできます。これからは仕事と家庭を両立しながらキャリアを積んで来られた先生の著書「自分に水をやる」をバイブルとし、自分を育て、願いを叶えられるよう色々なことに挑戦していこうと思います。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

「私なら説得できる」

東邦看護学会 理事長
横井 郁子

東邦大学に異動して間もなく学部2年生の必修科目「日本文化研修」の担当となった。北鎌倉円覚寺での宿泊学習である。個人的には「看護教育の基盤になる学びだ」と直感したが、当時は疑問を持つ学生や教員もいた。宗教の強制ではないか、所作に対する僧侶からの罵倒は教育的に問題ではないか等々。自分なりの意味づけをしつつも自信がなかった私は五島先生の研究室のドアを叩いた。突然の訪問にもかかわらず、書類の山を隅に追いやり紅茶を入れてくださった。温かい紅茶と笑顔で肩の力が抜けたとたん悩みが吹き出した。ひとしきり私の考えを聞いてくださった後に、「先生の思うようにやってみなさい。ただ、この科目は宗教を学ぶものではない。私なら禅の歴史からひもとき説得できる。」とおっしゃられた。そして、「協力は惜しみませんが、まずは先生がやれるだけやってみて。」と背中を押していただいた。教養のなさを、誰もが納得できるように意味づけができていない自分を恥じると同時に、挑戦しようと気持ちを新たにしたいあの日が今はとても懐かしい。

五島先生のように物事をきっぱりと言い切るためには確かな知識が必要であり、それは、先生の緻密な研究活動がそれを物語っている。また、だれもがその研究成果を活用できるように情報発信していくためには深い教養と幅広い人間関係が求められる。五島先生は研究者としての態度を私たち学会員に身を持って伝え、支えてくださっていた。

東邦看護学会は先生からの学びを生かし、一歩ずつですが前進します。
心からご冥福をお祈りいたします。